

「佐橋甚五郎」と「堺事件」の提示するもの

井村紹快

「興津弥五右衛門の遺書」が発表されたのは明治四十五年十月の中央公論、「阿部一族」が翌大正二年一月の中央公論、そして「佐橋甚五郎」が同じ大正二年四月の中央公論。以上三作が「意地」という単行本にまとめられたのが大正二年六月である。三作が連続的に発表され、一本にまとめられたのは、作者にそれだけの意気込みがあったからであろう。作品は、それまでの日本文学にない新しいタイプの作品であり、重厚な手ごたえのある出来栄えから、日本近代文学に歴史小説という一つの新しい分野を切り開くものになったことはたしかである。

「興津弥五右衛門の遺書」が殉死、切腹の美化であり、切腹殉死を頂点とする武士道礼讃の文学であるのは異論の余地のないことである。それをうけついで「阿部一族」は、殉死がきっかけとなった一族絶滅の物語である。そこには、さまざまなタイプの武士が登場し、作品の構成はしっかりしているが、くりひろげられる問題は簡単でない。うけとりようによっては、冷酷非情な封建制批判の文学とうけとれない事もない。無責任で軽卒な巷のとりざたと、藩政の実権を軽薄な人物が手中にしたとき、不幸が不幸を生み、討つ者も討たれる者も滅びてゆかねばならぬ宿命を、

冷徹で簡潔な文体で描き切っている。殉死が、興津弥五右衛門のように純粹に結晶したようなものばかりではないことを、この作品が描いているのはたしかである。

それでは、単行本「意地」の最後のしめくりのように収められている「佐橋甚五郎」がわれわれに語りかけて来るものは何であらうか。

「佐橋甚五郎」は、岩波版鷗外全集第十巻に収められているが、僅か十ページの小品である。一読すると、珍らしい話をきかされた、という以外つかみどころのない印象が残る。何故これを鷗外が書いたのか、書かずにはいられなかったものは何だったのか、それをつかみかねていらいらした感じさえわいてくる。

落ちついて読みなおしてみると、小品ながら、構成はしっかりしている。

慶長十二年（一六〇七）五月、朝鮮からの親善使節団が、駿府の城に家康を表敬訪問する。二百六十九名に及ぶ大使節団の代表は、三名の大夫である。使節団からは物々しく献上物が贈られ、家康からは丁重な引出物が出された。

使節団が家康の前から退出したとき、

「あの縁にゐた三人目の男を見知つたものはないか」

「誰も覚えてはをらぬか。わしは六十六になるが、まだめつたに目くらがしは食はぬ。あれは天正十一年（一五八三）に浜松を逐電した時二十三歳であつたから、今年は四十七になつてをる。太い奴、好うも朝鮮人になりすましをつた。あれは佐橋甚五郎ぢやぞ」

と家康は言いはなつ。すわと気色ばむ一座を家康は抑え、使節団は何事もなく帰つていった。ところで、佐橋甚五郎とは何物で、なぜそんなことを家康が言いだしたか、誰にも強い疑問が起こってくる。それを見すますようにして、作者は、佐橋甚五郎が家康の小姓だつたこと、朋輩を殺した罪を、甲斐の武将甘利四郎三郎を家康の指示で目出たく

討ち果たした功によって許される由来を描いてゆく。許されるには許されたが、家康の佐橋に対する扱いは冷たかった。その挙句、

「あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それにむごい奴が寐首を掻きをつた」という家康の言葉を、たまたま隣室にひかえていた佐橋甚五郎は、すっかり耳にしてしまう。それから間もなく、佐橋甚五郎の姿は、駿府城内からかき消すように消えてしまったのだった。

ここで、話は冒頭の部分とびたりと結びつくのである。一分の隙もない、理にかなった構成というべきであろう。だがそれだけでは話のつじつまがあつたというだけで余りにもあつけないので、作者は次のようなしめくりをつけた。

「天正十一年に浜松を立ち退いた甚五郎が、果して慶長十二年に朝鮮から喬兪知と名告つて来たか。それともさう見えたのは家康の僻目であつたか。確かな事は誰にも分からなんだ。佐橋家のものは人に問はれても、一向知らぬと言ひ張つた。併し佐橋家で、根が人形のやうに育つた人参の上品を、非常に多く貯へてゐることが後に知れて、あれはどうして手に入れたものかと、訝しがるものがあつた。」

こうしめくくつたあとで、作者は「此話は『統武家閑話』に拠たものである」と出典を明らかにしている。

このしめくりで話の辻つまはあうのだが、この整つた小品の読後感は、依然としてつかみどころのない、もどかしいものである事には変りはない。作品の材料となつた「統武家閑話」はほとんど作品の通りであり簡単なものである。ほんの一口話ほどの材料にこれだけ堂々とした肉付けをし、首尾ととのつた一篇の作品に書きあげた鷗外の創作力は、認めないわけにはゆかない。それはそれとして、この作品の読者に語りかけてくるものは何であるのか。「興津

弥五右衛門の遺書」「阿部一族」と鷗外文学の大きな転換点となる重厚な作品と共にまとめて出版されたこの作品が、単に人の好奇心をくすぐるだけのお話として書かれたとは思われない。

この作品の語りかけてくるものは何であるのかよく考えてみるために、「佐橋甚五郎」という人物を、ストオリイにそつてもう一度考えなおしてみよう。「口に出して言ひ附けられぬうちに、何の用事でも果すやうな、敏捷な若者で、武芸は同じ年頃の同輩に、傍へ寄り附く者も無い程であった。それに遊芸が巧者で、殊に笛を上手に吹いた。」と鷗外は簡潔正確に佐橋甚五郎の人物像を描いている。わずかに二、三行のこの描写の中に、作品に必要な条件（敏捷、武芸、笛）は、伏線としてすべて書き尽くされているのである。ところで、この文章を読むと、私たちの頭に、反射的に阿部弥一右衛門通信のイメージがうかんでくる。「阿部弥一右衛門は外の人の言ひつけられてする事を、言ひ附けられずにする。外の人の申し上げてする事を申し上げずにする。併しする事はいつも肯綮に中つてゐて、間然すべき所が無い。弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに只此の男の顔を見ると、反対したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。」と鷗外は阿部弥一右衛門について描いている。「阿部一族」の悲劇は、このたわいないような君臣の人間関係が発端になつたわけである。家臣があまりに俊敏鋭利すぎた事が、君臣の人間関係をまずくするということは、どんな時代、どんな社会でも考え得る事である。それが、「阿部一族」のばあい、一家絶滅の悲劇にまでつきつめてしまつたのである。

ところが、佐橋甚五郎のばあいは、一族に異常はなく、姿をくらました甚五郎が、二十四年後、朝鮮からの親善使節団の代表につきそふ高級官僚三人の中の一人として、堂々と家康にお目見えしたというのである。脱藩は、封建社会でもっとも重大な犯罪行為である。それを敢えてやつてのけたばかりか、朝鮮に脱れ、朝鮮の高級官僚になりあがつて、ぬけぬけと素顔を旧主の前に見せたというのである。

甚五郎は、二回無断で身をかくした事になっている。最初は、家康の嫡子岡崎二郎三郎信康に仕えていた時である。主君は十八歳、佐橋甚五郎は二つ齡下の十六歳であった。

信康の物語でをした歸りに、行列からかなり離れて、鷲が一羽沼にいた。それを撃てるか、撃てぬかの口論の果て、甚五郎一人が「撃てぬにも限らぬ」と言い張った。「それなら撃つてみる」「撃つには撃つてもいいが何か賭けるか」「おう、今身につけているものなら何でも賭けよう」と朋輩蜂谷と言ひ争ひになった。

主人信康をはじめ、主従の見守る中で、甚五郎は鉄砲をかまえた。発砲と同時に、鷲は羽をひろげて飛び立ちそうにして舞い落ちた。一同は感嘆した。

それでおわれれば、那須の与一の扇的のような話で、甚五郎は、武芸のはまれの面目をほどくことになったわけである。

ところがその翌日、蜂谷は疵もなく、息たえて死骸となっていた。調べてみると、蜂谷が自慢にしていた金熨斗附の大小がなくなり、代りに甚五郎の大小が置いてあった。察するまでもなく、甚五郎が賭けの代償として金熨斗附の大小を求め、蜂谷がこぼんだ。それを強いて甚五郎が求めるので、蜂谷は刀を抜いて抵抗しようとした。一瞬先手をとって甚五郎は蜂谷に当身をくらわせ、望みの大小を手に入れたのであった。誰も撃てぬと思つた鷲をみごとにしとめ、蜂谷との格闘も素手で相手をたおしたというのだから、甚五郎の俊敏さと武芸の腕が思いやられる。

それにしても、蜂谷にとってかけがえない大小を奪ひ、相手の息の根を止めてしまったのだから、たとえ賭けの約束を相手を守らなかつたとしても、事は重大である。若氣のあやまちが生んだとりかえしのつかぬ重大事であった。

甚五郎が身をかくした一回目である。この時は、甚五郎の従兄佐橋源太夫がとりなし役を買って出て、家康に助命

嘆願をしてくれた。家康は甚五郎の間違ひは間違ひとして、「甚五郎は伶俐な若者で、武芸にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討せい」と言い放つて、座を起つた。

ここで鵜外は、ごたごたした説明ぬきに、佐橋甚五郎を甘理四郎三郎の小姓として、いきなりその身边に出現させた。甘理四郎三郎は、甲斐の武田勝頼の武將として、遠江国榛原郡小山の城主をつとめていた。折あらば天下を手中にしやうとうかがつてゐる徳川氏にとっては、まことに目ざわりな存在だった。それにしても、武勇をもつてなり、一城の主である甘利を身一つで伐て、というのは不可能を可能にせよというか、死ぬというに等しい難題だった。

甘利の側にあらわれた甚五郎は、生来の俊敏さで、あっという間に甘利のお氣に入りの小姓になりおおせていた。満月の月見の宴のあつた夜、酒に酔い疲れた甘利は、佐橋の膝を枕に、甚五郎お得意の笛を吹かせて、いつの間にかまどろんでいた。

「忽ち笛の音がと切れた。『申し。お寒うはござりませぬか。』笛を置いた若衆の左の手が、仰向になつてゐる甘利の左の胸を軽く押へた。丁度浅葱色の袷に紋の染め抜いてある辺である。甘利は夢現の境に、寛いだ襟を直してくれるのだなと思つた。それと同時に氷のやうに冷たい物が、たつた今平手が障つたと思ふ所から、胸の底深く染み込んだ。何とも知れぬ温い物が逆に胸から咽へ升つた。甘利は氣が遠くなつた。」

これはどんな資料を探してもあるはずのない、鵜外自身の創作による描写である。むだのない、と同時に勘どころをびしとおさえた名文と言えよう。こうして甘理四郎三郎を単独で討つ、という不可能に近い難事を果した甚五郎は、甘利の髻を証拠に切りとつて、家康のところへ帰つた。

約束だから、家康は佐橋甚五郎に目見えを許したが、甘利の事は一言も口にしなかつた。

時代ははげしい時代であり、歴史は急テンポに変わっていった。古い封建制がくずれ、新しい徳川藩幕封建体制に編成がえされようとしていた時である。武田氏は滅び、信長は本能寺で明智光秀に討たれ、その光秀も秀吉に討たれた。徳川氏も、小田原の北条新五郎氏直とたたかい、その戦でも佐橋甚五郎は目ざましく働いた。その軍功により加増はあったが、賞美の詞はなかった。

天正十一年（一五八三）、秀吉の戦勝祝いに、石川与七郎数正が使者の命をうけた。「心の利いた若い者をつれてゆけ」という家康の言葉に、石川数正は、佐橋甚五郎を推せんした。

「あれは手放しては使ひたう無い。……」と前にあげた言葉をもって家康はその推せんを一蹴した。その家康の言葉が、次の間にひかえていた佐橋甚五郎の耳に入り、甚五郎に最後の決意をさせた。座を立てて退出したきり、甚五郎は行方をくらましてしまったのである。小判百両は、前からいつも肌につけていたという。

このストオリイは、一体何を意味するのだろうか。同輩を討ち果たした罪は、武田の武將甘利を討てば許してやろ、と家康は約束した。だから佐橋甚五郎は、言葉通り甘利を討って帰参した。それで佐橋甚五郎の同輩殺人の罪は許されたが、家康の扱いは冷たかった。しかし、一城の主である勇猛な敵將を討つのに、こんな方法でもとる以外に、どんな方法があったというのか。

我子のようにかわいがる敵將を討つ、それも寝首をかくとは油断のならぬ奴、「むごい奴」である。こうした男を手放したら何をしでかすかわからぬ、だから秀吉への祝の使者の供も許さぬ、と家康は甚五郎を評価していたのである。

光秀が信長を討ち、その光秀を秀吉が討つ、家康自身も、嫡子信康を自害させている、娘を豊臣家へ嫁がせている。政略上の必要とあれば、我子をもいけにえにして辞せなかつたではないか。明日はどうなるかわからない動乱の

時代である。家康自身、常人では考えられない残酷さを、自分の肉親に向けてさえくりかえして来ている。残酷に耐える精神がなかったら、生きぬけなかったし、天下統一の大業などなしえなかった、といつても過言ではなからう。

それだからこそ家康は、心底から信用できる人物で身のまわりを固めたかったのである。その点佐橋甚五郎は、俊敏で、武芸に秀でた逸材にはちがいがなかったが、人間的内面に、暖かさを欠いた無気味な人物と家康にはうけとれたというのである。家康自身が非人間的打算に徹して生きねばならなかっただけ、自分の臣下には人間的暖かさを求めるとは、勝手といえざいぶん身勝手な論法だが、動乱下の封建制に生きる武將の止むをえない矛盾だったのかも知れない。

これを甚五郎の側から考えてみると、敵将甘利を討てと言われたから、死を賭して甘利を討った。北条氏との戦も武功を立てた。そのあげく、耳に入ったのが、家康の自分に対する人間不信の言葉だった。立つ瀬がないとはこういう時のための言葉だろう。難題を果たして帰参した自分には、一応の物質的な褒賞はあった。しかし、精神的心理的扱いとしては冷たいあしらいしかなかった。その挙句にきかせられたのが主君家康の甚五郎に対する決定的不信の言葉だった。

命がけの闘争の果てに生まれた結果がこれだった。これ以上家康に忠節をはげんでも、君臣間の溝は深まるばかりにちがいない。家康、甚五郎の君臣の間は、興津弥五右衛門と細川三斎のばあいとは、似ても似つかぬ最悪のものになってしまった。興津弥五右衛門も主命で長崎へ赴いた際、争いから同輩を討ち果たした。しかし、主君三斎の判断で、何のおとがめもなく一生を細川三斎へ忠節を尽くして過ごし、君臣の人間的結びつきは、最高の深さにまで深められていった。

「阿部一族」の阿部弥一右衛門と主君細川忠利の関係は、興津弥五右衛門のばあいのように純粹にしつくりしたも

のではなかったが、君臣としての基本的な人間関係にくずれはなかった。ただ、あまりにも俊敏で反応の早い阿部弥一右衛門の人がらに、主君の方が反撥して、阿部弥一右衛門のいうことには、何でも反対するのが習慣のようになってしまった。それが、殉死のような重大問題のばあいにも出てしまったことから阿部一族の悲劇ははじまる。

五十四万石の大藩である細川藩では、新領主細川光尚と、阿部家を相続した阿部権兵衛との間に、個人的結びつきは無に等しかった。それで、阿部家の相続人阿部権兵衛は千五百石の阿部家の知行を相続できず、弟たちと細分化相続という扱いになってしまった。その憤懣から主君一周忌の時に髻を切って仏前に具えるという行動に出る。それが若い藩主光尚の怒りを買ひ、権兵衛は縛首の極刑に処される。このあと阿部一族は絶滅の悲劇へまっしぐらに落ちてんでゆくのである。

「興津弥五右衛門の遺書」に較べると、「阿部一族」はぐっと広い視野から、封建制、封建道徳が見直し、考えられようとしている。だが、佐橋甚五郎のような性格の人物は一人も登場しないといいていい。

「君、君たらずとも、臣、臣たらざるべからず」、藩主の前にはいついかなるばあいも絶対忠誠、というのが封建制に生きる武士のモラルだった。知行の分散相続に無念の涙をのみ、自分は縛首、一家絶滅の悲運にあった阿部権兵衛は何をしたというのか？ 前藩主一周忌の仏前に、自分の髻を切って供えただけではないか。唐突で、非礼なふるまいではあったかも知れないが、反抗という点では、自分で自分を傷つけただけのいじましい反抗ではないか。それにひきつづく一族絶滅のたたかいにしても、自滅のためのたたかいにすぎなかった。事ここに至って、生き残ることを考えている者は誰もいない、絶滅を期しての絶滅であった。この際、藩主光尚のあつかいに対する武士としての反抗はあったとしても、藩主の下からぬけ出して自分を生かすという考え方など、出てくる余地は全くなかったといっている。

佐橋甚五郎はこうした武士たちとは全く異質の武士であった。「むごい奴が寝首を掻きをつた」という家康の、甚五郎不信の言葉を耳にすると、ふん、と鼻をならして、家康のもとから、かき消すように身を消したのだった。時代が、興津弥五右衛門（一六四七）や阿部一族（一六四二）の事件より半世紀以上前の時代（一五八三）であり、徳川氏による藩幕封建体制が確立しておらず、動乱の時代だったわけである。それが佐橋甚五郎のような人物と、その行動を生んだ、といってしまうえばそれまでである。

鷗外は朝鮮からの使者の様子などは、鷗外一流の重厚な筆致で事細かに描いているが、それも史料の語る範囲をふみ出さないよう注意深く守り、不要な説明描写は、一切出さないようにしている。それが、この作品をどう受けとめ、どう解釈していいのかひどく読者をまどわすのである。

佐橋甚五郎は、甘利を伐つまでは身命を賭して、主命を果たすのだが、どんなに身命を賭しても、主君家康の心中には、甚五郎不信の念が増すばかり、と悟った瞬間に、ぱっと身をくらましてしまうのである。こうした甚五郎という人物に、忠でこりかたまった武士に感ぜられないさわやかさを、われわれは感ずるのである。君臣の間が、いついかなる時も重くるしくのしかかる「忠」のきずなでしばられていないのである。可能性の見通しが立たなくなったとき、「忠」はあっさりかなぐり捨てられるのである。

阿部一族は、一族絶滅を期して抵抗したが、それは破滅のための抵抗であり、細川藩を脱出し、藩主の支配から自由になろう、などと誰一人考えてはいなかった。それを甚五郎は、何のためらいもなく藩を脱け出し、朝鮮へわたり、そこで高官に出世し、日本へ派遣された使節団の一員として、家康の面前へ堂々と出現したのである。

甘理四郎三郎を討つまでは、主命とあればどんな身の危険を冒しても敢えて辞せず、というものが佐橋甚五郎にあった。そのあと、家康のあつかいに暖かさが消えたとき、甚五郎の内面にも家康への忠節の念は消えた。彼はいつも

百兩を身につけているようになった。というのは、いつでも主君の手元から脱走できる準備をととのえていたわけである。「忠」の觀念を捨て去った、あるいはもともと持っていなかったのが、佐橋甚五郎という人物である。

鷗外はどういうつもりで此の作品を書き、創作集「意地」にのせたのであろうか。作者はこういう佐橋甚五郎を、賛美はしていないが、否定もしていない。作者は何も決定せず、作品はそのまま読者の前におかれている。

否定も批判もされていない、ということは、武士の一つの生き方として、「佐橋甚五郎」的生き方をここで作者が認めていたのではないか。主君を捨て、国外に逃亡しても、あくまでも自分を生かす道を求めた佐橋甚五郎の生き方に、完成した封建制下では考えられなかった「武士」の意地、「武士」というには余りにも型にとられない人間臭い生き方をも、一つの武士の「意地」として鷗外はここで認めているのではないか。

「佐橋甚五郎」を独立した一つの作品として、それだけ考えてみようとする、解けるはずのないなぞをぼんと前に置かれたようなもので、つかみどころのないとまどいにいらいらするばかりである。それを、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」の中におき、そのつながりで考えてみると、封建倫理の拘束から解放された特異な存在としての「佐橋甚五郎」の存在がありありと浮かんでくるのである。「興津弥五右衛門の遺書」で、殉死を武士道の極致の結晶として描いてみせた鷗外は、「阿部一族」でぐっと視野をおしひろげ、殉死が必ずしも純粹単純なものばかりに限らず、一族絶滅の因となるばあいもあることを描いてみせた。さらにそれが「佐橋甚五郎」では、「忠」の觀念にとられず、君臣の間にすぎ間が生ずれば思い切りよく主家を捨て、国外に脱出してでもしぶとく己の道を切りひらく武士のあり方もありえたことを描いてみせたわけである。

この後の鷗外の関心や考え方が、「佐橋甚五郎」の方向で発展していったら、鷗外の歴史文学は、現在残っているものとずっと異なったものになっていったであろう。そうなっていたら、武士道に最高の芸術形式をあたえ、武士

道の最善の説明者となったといわれることもなかったであろう。

しかし、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」が堂々たる作品の骨格を具えているのと異って、「佐橋甚五郎」はつけたしのような作品でおわった。前二作に結びつけてはじめて、作品の意味が理解できるような、作品としての独立性の希薄なものになっている。このことは、これに続く鷗外文学の方向をくつきり暗示しているように考えられる。

2

「佐橋甚五郎」が理解しにくい作品であるに反して、「堺事件」の語りかけてくるものは、ぐっと鮮明になっている。しかし、鮮明であることは、作品の良し悪しには無関係の問題であり、それがどういう意味を持つかを中心にごで考えていってみたい。なお「堺事件」の発表は、大正三年二月の「新小説」であったことを頭においておきたい。

「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」が藩幕封建体制初期、徳川封建体制が固まりかけた時期の武士のあり方、死に様を描いているのに対し、「堺事件」では、藩幕封建体制がおわり、明治という新しい時代に入ろうとしている時の武人のあり方が描かれている。

時は明治元年戊辰の歳正月のことである。藩幕封建体制は崩壊したが、新しい明治の体制はまだこれからはじまろうとしているところである。どういふ政府のもとに、どういふ体制がつけられ、世の中はどうなっているのか、まだ全く見通しの立っていない時に起こった事件である。

治安にあたるには、藩幕時代のものが利用されるはかなかった。大阪、兵庫、堺という重要地域でも、幕府の諸役人は四散してしまつたので、とりあえず、大阪は薩摩、兵庫は長門、堺は土佐の各藩が朝令によりとりしめることに

なった。

そんなところへ、イギリス、アメリカ、フランス艦隊が摂津天保山沖に投錨、何となく不気味で不穏な形勢になってきた。国際法ははっきりしないし、彼らを退去させる実力はなく、どう対応していいのかわからなかった。そうした状況下で、港から一里沖に投錨していたフランス軍艦は、ボートをおろし、水兵を上陸させた。水兵は暴行を働くわけではないが、神社仏閣に無遠慮に立ち入る、人家に上がりこむ、女子をとらえてからかうなどした。

警備責任の土佐藩六番隊、八番隊が、舟へ返そうとしても通弁がいなくて言葉が通じない。捕えようとすれば逃げる。最後に、町家の戸口に立てかけてあった隊旗を、一人のフランス兵がとって逃げ出した。土佐兵は当然追いかけた。旗持に鷲頭梅吉というのが入っていた。梅吉は隊旗を奪って逃げるフランス兵に追いつき、脳天に鷲口を打ちおろした。水兵は一声叫んで仰向けに倒れた。即死である。隊旗はとりもどされた。それを見て、ボートに逃げこんでいた水兵は、短銃をいっせいに射撃してきた。六番隊、八番隊の隊長は、「撃て」と命令した。七十余挺の銃口はいっせいに火を吹いた。明治元年二月十五日の事である。

十六日、十七日とあわただしい緊張の日が続いた。その間に大阪に碇泊しているフランス軍艦 Venus 号から、公使 Leon Roche を通し、外国事務係へ嚴重な抗議が申し入れられ、朝儀は一も二もなく相手の申し入れをうけるようにきまってしまった。

一、土佐藩主自らエニユス号に向いて謝罪すること。

二、堺で土佐藩の隊を指揮した士官二人、フランス人を殺害した兵卒二十人を、交渉文書が京都に着いた三日以内に、右の殺害を加へた土地に於いて死刑に処すること。

三、殺害せられたフランス人の家族の扶助料として、土佐藩主が十五万弗を支払ふこと。

全く一方的な申し入れであったが、如何せん日本側にはこの要求を不当としてはねつけるのはもちろん、交渉する実力がなかった。何よりも外国とトラブルを起こしたくなかった。当不当を度外視して、先方の言うがままになるよりほかなかつた。ところで、藩主の謝罪や、死者の慰謝料はいい。負担は軽くないとしても、金銭は支払えばけりがつく。問題は死刑になる兵卒二十名である。射撃戦の場にいた士卒は七十三名である。その中から二十名の死刑者をどうして決定するのか。途法もない難問である。

しかし、事はあつけないほど簡単にすんでしまった。七十三名を一人づつ呼び出し、本人に銃撃したか否かを答えさせたのである。銃撃した、と答えたもの二十九人、しない、と答えたもの四十一人という結果が出た。

「此訊問が殆ど士卒の勇怯を試みると同じ事になったのは、人の弱点の然らしむる所で、実に己むことを得ない」と鷗外は註釈的説明を加えている。

勇者は正しくりっぱだし、怯者は軽べつすべきもの、という鷗外の道義観がまずここに大前提として出される。あまりにも単純明快なこのわり切り方には大きなこだわりを感じずるが、ここではいちおう先へ進もう。二十九名が撃つたことを認めたのだが、必要なのは二十人である。九名は余分である。どうするか。これまた簡単に稲荷社のくじできめられた。

二十名の死刑にきまつた者以外は、すぐ国元へ送り返され自由の身になった。死刑にきまつた二十人はどうか。甘んじて決定をうけ入れ、最後のもてなしとして出された酒肴に心よく酔い伏し、いびきをかいて寝てしまった。

それでそのまま死んでしまつては、あまりにあつけなさすぎる。そこで鷗外は、最後の反抗を起こさせる。士官を除いた十六名の者が、

「死ぬるのは構はぬ。それは兵卒になって国を立った日から覚悟してゐる。併し恥辱を受けて死んではならぬ。そこでは是非切腹させて貰はうと云ふことに衆議一決した。」

いったん寝た者も起こされて、最後の団交がはじめられた。しかし、十六名の兵卒の団交は一蹴されてしまったのだった。

「それは怪しからん。お構の身とは何事ぢや。我々は皇国のために明日一命を棄てる者共ぢや。取次をせぬなら頼まぬ。そこを退け。我々はぢきに通る。」

この実力行使宣言は、藩幕封建制下の兵卒には考えられない言葉であり、行動であった。事態容易ならず、と大目付が出てくると、

「我々は朝命を重んじて一命を差し上げるものでございます。併し堺表に於いて致した事は、上官の命令を奉じて致しました。あれを犯罪とは認めませぬ。就ては死刑と云ふ名目には承服が出来兼ねます。果して死刑に相違ないなら、死刑に処せられる罪名が承りたうございます」

隊長が非理の指揮をし、お前たちは非理の行動に及んだのだ。と大目付が上からおさえてかかると

「いや。それは大目付のお詞とも覚えませぬ。兵卒が隊長の命令に依つて働くには、理も非理もござりませぬ。

隊長が撃つと号令せられたから、我々は撃ちました。命令のある度に、一人々々理非を考へたら、戦争は出来ませぬ。」

「堺での我々の挙動には、功はあつて罪はないと、一同確信してをります。どう云う罪に当ると思召か。今少し委曲に御手下さ。」

こここのやりとりは、言葉の格調も高く、文章はびいんとはりつめてすぎがない。新しい時代の到来を告げる声がか

こえて来るようである。国家、戦争、人間に関する重要な問題に発展してゆく可能性の一步手前まで来ている。作者の姿勢一つで、鷗外の歴史小説、鷗外文学の性格もここで根本から変ってゆく可能性もありえた、と考えられる。死と責任を名もなき二十名の士卒におしつけ、自らは涼しい顔して生きてゆこうとする高級官僚の偽瞞、破れんちも根本から暴露することが出来たはずである。

しかし、「堺事件」のレアリズムもここまでだった。官僚も崩壊しかけた藩幕封建制下の官僚であり、事面倒と見るや、死罪の兵卒の言い分はあっさりうけ入れられ、事はすべてまるくおさまってしまうのである。死刑は切腹であり、死んだあとは士分お取扱いいというので、彼らは欣然として死をうけ入れてしまったのである。ただここで注意を要するのは、封建制下の切腹は、主君に対する忠誠の証か、武士の名誉を守るためのものであった。「堺事件」の切腹は、「皇国のため」という全く新しい目標が正面に出て来たことである。士分にとり立て、お国のための切腹なら、命など何でもない、いつでも喜んで死んで見せる、という新しいモラル、新しい日本人の理想型がここにうち出されたのである。

「歌日記」の「石田治作」で

「聴け治作 そのよし告げん

かねてより 死を決したる

汝こそ 撃たせて刺さぬ

生くる道 求むる敵の

刺されつつ いかでか撃たん

一すじの 髪だに容れぬ

勝敗の 機はここにあり

おしなべて 軍もしかなり

国もしかなり」

とうたつた日本軍人モラルが、具象的な結晶としてここに出されたのである。徴兵制度がしかれ、富国強兵を目ざそうとしていた当時の日本では、軍人のモラルは即日本人のモラルであった。その意味で「堺事件」の持つ意味は大きい。

切腹の場所は妙国寺、埋葬は宝珠院ときまつた。いよいよ死を前にして、垣内が此の世の名残りに妙国寺の鐘をっこうとして寺僧と争いになったり、死後埋葬される墓穴や、死体を入れる大瓶を見にゆき、その大瓶にとびこんだり、「君と僕とは生前にも寝食を共にしてゐたが、見れば瓶も並べてある。死んでからも隣同志話が出来さうぢや」とふざけあっている。

大仰な行列、切腹の儀式の場を鷗外はこまごまと描写すると同時に、切腹を前にした面々の嬉々とした言語動作、死に対する不安やおそれのかけらもない様子を、強調する創作描写をつづけている。さていよいよ切腹の場面である。

「呼出の役人が『箕浦猪之吉』と読み上げた。寺の内外は水を打つたやうに鎮つた。箕浦は黒羅紗の羽織に小袴を着して、切腹の座に着いた。介錯人馬場は三尺隔てて背後に立つた。総裁宮以下の諸官に一礼した箕浦は、世話をの出す四方を引き寄せて、短刀を右手に取つた。忽ち雷のやうな声が響き渡つた。

『フランス人共聴け。己は汝等のためには死なぬ。皇国のために死ぬる。日本男子の切腹を好く見て置け』
箕浦は衣服をくつろげ、短刀を逆手に取つて、左の脇腹へ深く突き立て、三寸切り下げ、右へ引き廻して、又三

寸切り上げた。刃が深く入つたので、創口を広く開いた。箕浦は短刀を棄てて、右手を創に刺し込んで、大綱を掴んで引き出しつつフランス人を睨み付けた。

馬場が刀を抜いて頂を一刀切つたが、浅かつた。

『馬場君。どうした。静かに遣れ』と、箕浦が叫んだ。

馬場の二の太刀は頸椎を断つて、かつと音がした。

箕浦は又大声を放つて、

『まだ死なんぞ、もつと切れ』と叫んだ。此声は今までより大きく、二丁位響いたのである。

初から箕浦の挙動を見てゐたフランス公使は、次第に驚駭と畏怖とに襲はれた。そして座席に安んぜなくなつてゐたのに、この意外に大きい声を意外な時に聞いた公使は、とうとう立ち上がつて、手足の措所に迷つた。」

生まれてはじめて日本人の切腹を目前にし、十一人までは臨検の席についていたが、十二人目では、兵卒一同フランス公使の中に囲んで、我皇族、諸役人にあいさつもせず、あたふたと逃げかえつてしまつたと鷗外は描いている。薩摩、長門、土佐以下七藩の家老がフランス軍艦におもむくと、「土佐の人々が身命を軽んじて公に奉ぜられるには感服したが、何分この惨澹たる状況を目撃するに忍びないから、残る人々の助命の事を日本政府に申し立てる」とフランス公使は言った。というので、残る九人は切腹免除ということになつてしまつた。つまり、堺事件の士卒の切腹ぶりが、フランス人に畏怖と敬意の念をあたえ、そうなつてしまつたというのである。

しかし、なおその後の話がある。しばらくは義士あつかいであつた九人が、土佐へ送りかえされた時、待つていた

のは流罪命令であった。異議申し立ても、「自殺した十一人の苦痛に準ずる御処分」というのでおし切られてしまった。五月二十日に流罪され、十一月十七日に明治天皇即位の特赦で流罪を免ぜられたのであった。再び召しかかえられたが、身分は並の兵卒であり、「土分取扱の沙汰は終に無かった。」と鷗外は結んでいる。

この結びは、相手が無力と見るや、平然とうそをつき、ごまかす官僚の性格に対する手きびしい批判にはちがいないが、「堺事件」の主題は、皇国のためとあれば死をみることに帰するが如き兵卒たちの姿をえがきあげることにあることに間違いはない。興津弥五右衛門の晴れがましく仰々しい殉死、「阿部一族」の武士の意地を通すための一族全滅のものがたり、それらを通りぬけて「堺事件」までくると、皇国のためとあらば欣然死につく兵卒というように、まったく新しい「皇国」という觀念がここで出て来る。時代風俗はまだ藩幕時代そのままであるが、精神内容はすでに明治のものであり、近代日本の基礎になるものがここにすえられようとした事になる。木下杢太郎が、武士道に最高の芸術的形式をあたえ、最善の説明者となったと讃えた鷗外は、「堺事件」では、はっきりそのわくをふみ出している。それは武士道をうけつぐものであるかも知れないが、武士道を通り越し、近代国家の日本人としてのモラルの提出になっていたのである。

簡潔で力強い文体、周到な史実の調査をもとに、「堺事件」は小品ながらきりつとひきしまったみごとな出来栄を見せている。又、圧力が利かぬとみれば、だましたりすかしたり、どんな方便をも恥じ知らずに使ってみせる高級官僚の偽瞞性を作者は一方で鋭くあばいてみせる。土分にする約束で切腹を承知させながら、「土分取扱の沙汰は終に無かった」の結びの一句は、官僚の偽瞞性をはき捨てるような鋭さで表現している。

しかしそれは、高級官僚のずるさがずるさとして描かれるだけ、切腹して果てた士卒がすがすがしく清潔に感ぜられる、というしくみになっているのである。主題はあくまでも切腹した人たちの忠誠心であり、官僚批判は主題をき

わだたせるための背景にすぎない。歴史の歯車の中で、切腹に追いこまれ、新しい時代を目前にしながら死んでゆかねばならなかった人たちに、誰しも同情の念を禁じえないのはたしかである。だが、悲運をいたむのを通りこして、皇国のためとあれば、理否を越え嬉々として切腹してゆく人たちに、近代日本人のあるべき基本姿勢を提示したものであつたとすると、深い疑問を持たざるを得ない。ここで鷗外が提示した道徳が、第二次世界戦争中、非合理で軽薄、狂気の極致に拡大され、民主主義もヒューマニズムもすべて圧殺されていったことを考えてみると、鷗外はここで容易ならざる役割を果たしたと考へざるをえない。

ここで私は、中野重治の言葉を思い出す。「その美しい晩年を、非合理的なものの合理化のために奮闘せねばならなかったかつての合理主義のための戦士の姿はいたましい。おそらくわれわれは、ここで、逍遙の没理想論にたいていてイデエをかかげた若かった鷗外を思いうかべ、今や同じその人が、国の権力とそれに索かれる多数者の心理とに追随して、もっとも卑俗な没理想論におちいっただけでなく、すすんでそれを固定化して、敵によってそれが大きく崩されるのに先手を打とうとしている姿を見いだすわけである。すぐれた鷗外は、ここで教師としてもう一度大きく登場してくるが、この教師は、もはやあらゆる区切りを取りはらって人生に直面する生活の探究・開拓における教師ではなく、哲学的に最も卑俗な折衷主義者としての味気のない修身教師である。」

（『鷗外その側面』「漱石と鷗外の位置と役割」）

中野重治の言葉はやや性急でわかりにくい。しかし、「堺事件」を読んで考えなおしてみると、ゆれ動いた鷗外文学の到達した本質を、誰よりも早く、正確に中野は言いあてていのではないか。「堺事件」が、小品ながら、史料をもとに重々しく迫ってくる力をもった作品であるだけに、それがどんなに危険なところへ来てしまっている作品であるかを、私たちは今しつかり見定めなければなるまい。